
花の雫。

海田 陽介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

花の靈。

【Zコード】

Z7058C

【作者名】

海田 陽介

【あらすじ】

大学を卒業してから小さな植栽関係の会社で働いているわたしは、過ぎていく毎日に、寂しさのような、物足りなさのようなものを感じている。ある日、わたしがいつものように植物の世話をしていると、会社の先輩が彼女に声をかけてくる。そしてふとした会話の流れから、その先輩の口から、花にまつわる、ある少し哀しい過去が語れことになる。その先輩の話す少し哀しい花のエピソードに耳を傾けているうちに、わたしもふと過去の花にまつわる記憶を思い出す。ふたつの花の記憶は次第に重なりあってわたしの心のなか

で静かな変化が起つていいく・・。

みんな今頃何をしてるんだろうな、と思つた。

社会人になつてからは自由になる時間が少なくて、なかなか学生のときのように友達とどこかへ一緒に遊びに行つたりすることができない。仕事が忙しくて毎日がそれだけで終わってしまう。休みの日は仕事疲れで一日寝ているようなことが多いし、余裕があるときでも彼氏とデートしたりすると、もう他に時間は残らなくなつてしまつ。

自分のなかに、何に対するというわけでもないのだけれど、漠然とした、不満のような、寂しさのような、そんな感情があつた。

ふと、パソコンの画面に向かつっていた手を止めて、すぐとなりにある窓の方へ視線を向けてみる。するとそこには、どんよりとした灰色の雲が見えた。目に映る視界全体が、空の色素が薄く溶けだしたような灰色に染まつてしまつている。

雨が降るのは時間の問題かもしれないな、と思つた。

「小西さん」と、声がした。ぼんやりとしていたから少し驚いて振り向くと、そこには課長の島崎さんが立つていた。度の強い眼鏡をかけた、ひげの濃い、やせ形の男のひとだ。髪型はいつも綺麗に三分けにしている。かつらみたいな髪型だなあ、といつも思つてしまのだけれど、そんなことはとても口に出しては言えない。訊いたことがないからわからないけれど、歳はだいたい四十歳を少しすぎたくらいに見えた。

「…」これ、この前言つてた資料です。どうぞ使ってください

軽く会釈して、その資料を受け取る。わたしがその資料を受け取ったことを確認すると、彼は無表情に自分のデスクの方へと戻つて行つた。

…あのひとはどうも苦手だな、と思つてしまつ。決して嫌なひととかではないのだけれど、仕事以外のことではあまりしゃべつてくれないし、少し気まずく感じてしまう。…というより、この職場全体の雰囲気がどこかよそよそしい感じだつた。

べつにとりたてて嫌な人がいるわけじゃないのだけれど、みんな接し方が淡々としていて愛想がないのだ。いかにも仕事上のつき合いといった、広がりのない、狭く、閉め出されていつてしまつよつな閉塞感を感じてしまう。そう感じてしまうのは、自分と年齢が近いひとがいなせいもあるのかもしれない。

わたしは去年大学を卒業して、この会社に入社した。庭のデザインや、植物を育ててそれを販売したりする小さな会社だ。従業員の数は全部合わせても三十人に満たないくらい。狭い世界だ。だからよけいに、対人関係がよそよそしいと息苦しさを覚えてしまつ。

学生のときのよう人に人間関係が広がつていいくようなことがないし、友達と呼べるようなひとも今のところいない。仲が悪いといふわけじゃないんだけれど。会えばちゃんと挨拶はするし、仕事中や、休憩時間に軽く世間話をしたりするようなことはある。年に何回か飲み会もあるし…。でも、それだけなのだ。それ以上に広がつていいくことがない。

…というよりも、それほど広げたいわけじゃないのかもしれない。よくわからないと思つてしまつ。…何だかみんな十歳も二十歳も年

上で、あまり友達という対象ではないのだ。

仕事自体は楽しい。わたしは昔から植物を育てたりするのが好きだったたし、小さな会社だから、まだ若くて経験のないわたしにも庭の「デザイン」とか大きな仕事を任せてくれる。人間関係さえ、割り切つてしまえば、今の仕事はそれほど苦じやないとも思うのだけれど…。

急いでこの書類を作ってしまわないと、と焦った。お昼からは現場に行つて、細かい打ち合わせをしなくちゃいけないし、そのあとは今栽培している植物の手入れをしなくちゃいけない。そしてそれが終わつたらまた会社に戻つてきて、見積もり書の作成だ。まだ他にも今日中に片づけてしまいたい仕事はたくさん残つている。：何だか仕事が山積みでうんざりしてしまつ。今日は残業になつてしまふかも知れないな、と思った。

お昼を過ぎると、思つていた通り雨が降り始めた。激しくも降らなければ弱くも降らない雨で、その雨が淡い水色の上に、薄く黒を重ねたような色彩に空間を染め上げていく。空から落ちてくる水色の粒が、わたしが着ているレインコートの上を小魚のようにね回る音が聞こえていた。

何とか雨が降り出す前にうち合せが終わつて良かつたな、とほつとした。雨のなか、庭作りの進行具合を業者のひとと一緒に確認していくのは何かと面倒な作業だ。とはいっても、雨のなか植物の世話をするのも、なかなか骨の折れる作業だけれど。

バラが、蕾をつけはじめていた。慣れないなか苦労して育ててきたものだから、それが蕾をつけてくれると嬉しい。花が咲くのが楽しみだな、とわくわくした。

バラの蕾は、舞い落ちて来る透明な水の粒に微かにその身体を震わせながら、じっと空を見据えていた。それはもつと雨水が欲しいと望んでいるみたいにも見えたし、あるいはその見上げた空から太陽光が差し込んでくるのを待ちにしているみたいにも見えた。

手を伸ばして、軽くその蕾に触れてみる。すると、やわかい感触があつた。ソフトクリームみたいなふわっとした感触があつて、水に濡れているせいか、冷たく感じられる。

小学校の頃に、確か理科の実習だつたと思つただけれど、アサガオの種を植えたことがあったのをぼんやりと思い出していた。他の同級生のアサガオはどんどん大きくなつていいくのに、わたしのアサガオだけはある時期を境に成長を止めてしまった。

しばらくするとそれは茶色い、パサパサした紙みたいになつて、触ると、ボロボロに崩れなくなつてしまつた。みんなのアサガオは赤や青や黄色といった、色とりどりのきれいな花を咲かせていくのに、自分の鉢植えだけには何の花も咲かなかつた。雑草すら生えることもなくして、そこはただの茶色い土を盛つただけの場所になつてしまつた。

何だかそれがすごく寂しくて、哀しくて、悔しくて、泣いてしまつたのをよく覚えている…。蕾についた細かな水の粒は、そのとき零した涙を彷彿とさせた。

「どうだい？」

と、ふいに背後で声がした。

ふと振り返つてみると、そこには後藤さんが立っていた。やっぱりわたしと同じように黄色のレインコートを着て、二三三四しながらこちらを見下ろしている。

後藤さんは、あともう少し四十歳に手が届こうかというくらいの、ちよつと小太りの男のひとだ。その口元にはいつもひとつにやうな微笑が浮かんでいる。どことなく学校の先生みたいな印象を受けてしまつのは、丸縁の眼鏡をかけているせいかもしれない。少し後ろに後退しはじめている生え際なんかは、その優しげな雰囲気のせいか、滑稽というよりは、むしろチャーミングに感じられた。

後藤さんは、この職場のなかでわたしが一番頼りにしているひつだ。そして同時に、一番親しみやすいひとでもある。仕事を一から丁寧に教えてくれたのも、やつぱり後藤さんだった。

「どれ」と、言つて、彼はわたしのとなりにしゃがみこむと、わたしが育てているバラを興味深そうに観察した。そして何秒間の間黙つてそのままいたあと、横を振り向いてわたしの顔を見ると、「うん。このぶんだときれいな花が咲きそうだね」と、言つた。

そう言われると、嬉しくなつて思わず笑みがこぼれてしまう。最初の頃は上手いかなくて本当に苦労したのだ。一度、高価なバラの花を自分の不注意から全部枯らしてしまつたこともあった。

「順調にいけば、明日にでも咲くんじゃないかな」と、後藤さんはつけ加えるよろこび言つた。

わたしはもう一度改めて、自分が育ててきたバラに目を向けてみ

た。明日に着た頃にはもう花が咲いているのかもしれない、そう思うと、自然と気分は高揚した。

「…」の仕事つて世話とか色々大変だけじ、「んなふうに自分が育てた植物がちゃんと育つてくれる嬉しいですよね」と、わたしは後藤さんの方を振り返りながらそう言ってみた。

すると、後藤さんは短く頷いて、「僕がこの仕事を続けていられるのはそれがあるからなよくなもんだね」と、答えて、少し笑った。笑うと目尻に深い皺ができる。それから後藤さんはおもむろに立ち上がると、「僕が担当してる花、今、きれいに咲いてるんだ。今朝咲いたみたいなんだけどね。見に来る?」と、言つた。

わたしは、「もちろん、行きます」と、答えて、立ち上がった。

後藤さんはわたしの前を黙つて歩いていく。わたしも黙つて後藤さんのあとに続いた。後藤さんの作業場と、わたしの作業場は少し離れているのだ。個人個人持ち場のようなところがあつて、それがそれぞれの植物を担当している。後藤さんは一体何の花を栽培しているんだろうな、と思つと、ちょっとわくわくした。

後藤さんの受け持ちの花壇には、紫水色の花が咲いていた。見たことのない種類の花で、星の形を立てに細長くしたような花びらの中央に、ピンク色の色素がぼんやりとにじむように広がっている。花びらの紫水色の色彩は、目に冷たいような透き通った色をしていた。そのせいか、その花を見ていると、きれいだなと思うの同時に、何か哀しみに似た感覚を感じてしまう。

もつとその花をよく見てみたいと思つて、わたしはその場にしゃがみこんだ。

「雪溶草つていうんだ」と、わたしのとなりから声が聞こえてきた。ふと振り返つてみると、いつの間にか後藤さんもわたしのとなりにしゃがみこんで花を見つめている。その花を見つめる彼の瞳には、氣のせいもしれないけれど、何か失われてしまつたものを見るような淡い光があるようと思えた。

「ユキドケソウ?」と、わたしは彼の言葉を繰り返した。

すると、後藤さんは軽く頷いて、「ヨーロッパが原産の種の花ですね、春の、ちょうど雪解けの季節に、川辺に咲く花なんだよ」と、説明してくれた。「雪解け水のせいなのかどうよくわからないけど、透き通るようなきれいな紫色の花が特徴なんだ。日本に来たのは明治のはじめ頃なんだけど、あんまり知られてないね」

わたしは後藤さんの説明に耳を傾けながら、改めて目の前に咲く、紫水色の花を見つめてみた。見つめているうちに、今見えている視界のなかに重なるように、まだ所々に雪が溶け残る川辺に、春の初々しい日差しを浴びながら、どちらかというと控えめに蕾を広げる花がふうっと浮かびあがってきた。

「今年から実験的にいれてみよつていう話になつたんだよ」と、後藤さんは続けた。「実を言うと、この花をいれてみよつて社長に提案したのは僕なんだ。日本ではあんまりなじみのない花だから、まだ受容があるかどうかわからないけど、個人的につよつと思いいれがあってね、それで前々からどうしても入れてみたかったんだよ」

「の花に一体どんな思い入れがあるのでうと思つたけれど、口に出しては何も言わなかつた。後藤さんの花を見つめる表情がいつ

もよりも真剣で、そんな真剣な表情を見ていたり、軽い気持ちで訊いてしまってはいけないような気がしたのだ。

もう一度、田の前に咲く、可憐な感じのする花に田を向けてみた。花は雨に濡れて、たださえその涼しげな色彩をより一層涼しげな感じに見せていた。

そういえば雨が降っているのだ、と思つた。そのことを今さらのように思い出した。雨が地面をやわらかく濡らしていく音と、自分が着ているレイコンートを雨がパボッポッと打つ音が聞こえている。その両方の音を、意識して重ね合わせるようにして聴いていると、それはとても美しい協奏曲のように感じられた。

そして、美しいのと同時に、さよならを感じもある。

哀しみの花

…あのとき、わたしの鉢植えにだけアサガオが咲かなかつたとき、自分でもびっくりするくらい、わたしは泣いてしまつた。その理科の時間が終わつたあとも、声をあげて泣きはしないまでも、ずっと、ずつと、涙を零していいたような気がする。

…自分でも何がそんなに哀しいのかよくわからなかつたけれど、涙はなかなか止まらなかつた。周りの友達は気を使ってわたしに優しい言葉をかけてくれたけれど、でも、そんなふうに優しくされると、またよけいに哀しくなつた。

理科の先生の呼び出されて、その先生の職員室がある理科室に行つたのは、確かその日の放課後だつたような気がする。

理科室のとなりに、準備室も兼ねた先生の部屋があつた。あのときも雨が降つていて、教室にはその雨音が静かに響いていた。

わたしが職員室に入つていくと、先生は窓際に立つて、ぼんやりと窓の外の景色を眺めていた。窓の外には花壇があつて、そこに咲いている花を眺めているみたいだつた。

先生はわたしが入つてきたことに気がつくと、振り向いて、且元で優しく微笑みかけた。髪の毛の薄くなつた、外見はもうほとんどおじいさんといった感じのする先生だ。後藤さんと同じようにまるぶちの眼鏡をかけている。

「…アサガオは残念だつたなあ」と、先生は口を開くとそつと呟つた。わたしは黙つて軽く頷いてみせた。

「でもそういうこともあるもんだよ。氣を落とすことはないや。」

植物は結構デリケートで気分屋などころがあるから、ちょっとしたことですぐ機嫌を損ねてしまうんだな。…先生もこれでも随分苦労したんだ」

わたしは何て答えたらいのかわからなかつたので、黙つていた。

ぐるりと職員室を見回してみると、そこには理科の実験で使う色々なものが置いてある。顕微鏡、地球儀、分銅、よくわからい液体の入つたオレンジ色をした容器、ホルマリン漬けにされた、内蔵が露出している魚。それから人体模型・化石、水槽にはこの前授業で使つたメダカが気持ちよさそうに泳いでいた。採点の途中だつたのか、先生の机の上には赤丸やバツ印のついた答案用紙が置いてあつた。

わたしの視線のさきに気がついたのか、先生はにやりとひとの悪い微笑を浮かべると、「この前のテストひどかつたぞ。二十点だつた」と、言つた。

わたしはその言葉に驚いてしまつた。自分のなかではこの前のテストはよく出来たつもりだつたのだ。「うそ?」と、わたしが声を上げると、先生は可笑しそうに少し笑つて、「ウソだよ。よく頑張つたな。九十五点だつた」と、言つた。その言葉を聞いて、わたしは少しホッとした。花が咲かなかつたうえに、テストまでひどかつたら、あんまりだと思った。

「話つてなんですか?」と、わたしはふと思い出して訊いてみた。すると、先生は窓の外を指さして、「あそこに咲いている花」と、言つた。

見てみると、そこには色素の薄い、黄色いの、きれいな花が咲いている。丸みをおびた花びらが可愛らしい印象を受けた。

「あの花の種を、小西和華さん「あげよう」と、言つて先生はこち
らに向き直ると、わたしの手を取つてその手のひらを開かせると、
そこに米粒程の小さな種を握らせた。

驚いたのは、その種子の色まで、淡く、透き通るようなきれいな
黄色をしていてことだった。まるでガラス玉みたいに見える。わた
しが驚きと戸惑いでしきりに瞬きしていると、「その花はかなり神
経質な性格をしてるから、ちゃんと花が咲くところまで育てるのが
す」「く難しい。だけど、その花が育てられるようになれば、あとは
大概の植物は大丈夫になる。今回のアサガオみたいに枯れることも
ないだろ」「うな」と、先生はからかうつよに言つた。

わたしは手のひらの上の種と、先生の顔を何回か見比べてみた。
どうして先生がわたしにこの植物の種をくれたのかよくわからなか
つたのだ。そう思つて、わたしがそのことを尋ねよつとすると、そ
れを制するように先生の方が先に口を開いた。

「…もうだいぶ前のことになるな」と、先生はぼつりと呟くよつに
言つた。

「生きていればもう今頃はずいぶん大きくなつていたんだけどね」
そう言つた先生の声はいくらか寂しげに空気を震わせていった。

まるで外に降る雨に濡れてしまつていてるみたいに感じられた。

「小西さんによく似てるんだ。すごく花が好きな子でね、自分のお
小遣いで花の種を買ってきては、大事そうにその花を育てたりして
たよ」

一体何の話をしているのだろうと思つて、わたしは黙つて先生の
顔を眺めていた。

「…今から二十年ぐらいの前かな。先生にも子供がいたんだ。小西

さんを見ると、どうしたものかのことを懐かしく思い出してしまつ

まつ

先生はそう言つと、口元で少しきこちない感じに微笑んでみせた。
「恵つてこうな前の子だつたんだけどね…事故にあって、中学校に上がる前に死んでしまつた」

わたしは先生が口にした事実の重さに、言葉が出てこなかつた。何て言つたらいいのかわからなかつた。しばらくの沈黙があつて、その沈黙に吸い寄せられるように外からたくさん雨音が入つてきた。そしてその雨音は部屋のなかで静かに弾けると、ほんの少し、部屋を冷たく湿らせていつた。

「どうして死んじやつたんですか?」と、わたしは少し迷つてからそう尋ねてみた。尋ねてしまつてから、やつぱり訊かない方が良かつたかな、と思つた。

「…交通事故だつたんだよ」と、先生はわたしの間にそう答えた。答えたときに、先生の顔の表面で、哀しみが、それとわからないほど微かさで震えるのがわかつた。

「居眠り運転でね、信号が赤なのに突っ込んで、ちょうど横断歩道を歩いていたあの子ははねられてしまった。…まあ、そんなにスピードは出てなかつたから、外傷はそれほどでもなかつたんだけど、ぶつかつたときに強く頭を打つてしまつてね、意識不明の昏睡状態になつてしまつた。いわゆる植物人間つていうやつだね。…苦しそうな表情を浮かべながら眠るあの子の顔をベットの側で見ながら、先生は何もしてあげることができなかつた。…そのときはすごく悔しかつたし、辛かつたね」

先生はそこまで話すと、わたしの方へ向けていた視線を、また窓の外の、花壇の方へ向けた。花壇に咲いた花は、強い雨に打たれて、今にも押しつぶされてしまいそうに見えた。

「でも、ずっとあの子の側についてるうちに、あの子が小さな声で何かを呟くのが聞こえたんだ。よく耳を傾けてみると、微かに花つていう言葉が聞こえてくる。…その言葉を聞いて思つたんだ。そうだ、花だ、つて。何か彼女が喜ぶような花をプレゼントすれば、あるいは彼女は助かるかもしれないって。…自分が花を育てて、それをプレゼントすれば恵は助かるかもしれないって」

先生は窓の外に視線を向けたまま、ゆっくりとした口調でそう語つた。

「今から思えば、バカな話なんだけど、でも、そのときは結構本氣でそう思つていてね、早速、花を育てることにしたんだ。…育てる花は、できるだけ扱いが難しいやつがいいと思つた。その花が咲いたとき、何か奇蹟が起こりそうなやつがいいと思つた。そして、そんな花はないかと色々図鑑を探してみると、やっと見つかったんだ。気温や、湿度や、水分、日照時間、そういうった色んな条件がきれいに揃わないと、滅多に花を咲かせない花。…光輝草っていうんだけどね。その花の種を取り寄せると、すぐに栽培に取りかかつたよ。でもやっぱり、なかなか難しかった。どんなに慎重に育てたつもりでも、すぐに枯れてしまうんだ」

わたしは手のひらを開いて、そのなかにある、透き通るように黄色い種子を眺めてみた。雨の色素がそのまま溶けだしたように暗く陰つて見える室内で、手のひらのなかのそれはまるで太陽光の欠片みたいに思えた。

「でも、そいやつて色々試行錯誤している間にも刻々と時間だけは

過ぎていく…気がついたら、娘が植物人間の状態になつてから、もう三ヶ月が経とつとしていた。医者にもそろそろ覚悟をしておいた方がいいかもしないというようなことを言われてね、内心、先生はすごく焦つたよ。早くしなければって。…そんなときだつた、やつと育てた花が順調に育ちはじめたのは。これは上手くいくかもしれないと思った。そして、何とか薔をつけるところまではいつたんだ

不意に、広げた手のひらの隙間から、そこにあつた種子がいくつか床に零れ落ちてしまった。種子が床に散らばる音と、雨音は、奇妙に重なりあつて聞こえた。ふと気になつて、先生の方を見てみると、先生はこちらを振り返つて、零れた種子をいくらか寂しそうに眺めていた。そして、その場にしゃがみこむと、そこに散らばつた種子を拾い集めて、再びわたしの手に握らせてくれた。

「『めんなさい』と、わたしは思わず謝つていた。先生はそれについては何も言わずに、「この花は本当に氣分屋だからね」と、言つて、小さく笑つた。そしてまたもとのように立ち上がり、まだそこに花が咲いていることを確認するように、窓の外に目を向けた。

先生の目は心持ち細められていて、それは何か哀しい光景を眺めているみたいにも見えた。

「…結局ね、花は咲かなかつたよ」と、先生は言つた。

「仕事に行つて帰つてきてみたら、物の見事に枯れてしまつていた。ひょつとすると明日あたり咲くんじゃないかと思つて楽しみにしていたところだつたから、その落胆といつたらなかつた。…思えば、もつとよく日光を当てようと思つて、変に日当たりのいい場所に移したのがいけなかつたんだ。黄色かつた薔が茶色く変色して、空気

が抜いたみたいにべつたりしてゐるんだ。

「…それからすぐあとだつたな。娘が息を引き取つたのは。…あのときは自分の不注意が悔やまれたね。まるで自分の不注意から娘を死なせてしまつたような気がした」

先生はそう語り終えると、しばらくの間黙つていた。わたしも黙つていた。

訪れた沈黙のなかを、粒の大きい、やや角張つた雨音が流れすぎていつた。外に降る雨はあるで全てのものを押し流そうとしているみたいに見えた。雨を眺めているうちに、花壇に咲く花のことがだんだん心配になってきた。

「…花、大丈夫かな」と、わたしはポツリと言つた。すると、先生はこちらを振り返つて、「大丈夫だよ。一度咲いた花は、育てるのが難しいぶん、強いんだ」と、答えた。それから、

「…先生があの花をちゃんと咲かせることができるようにになつたのは、娘が死んでから一年くらいが経つてからだつたな」と、言葉を続けた。「娘を死なせてしまつたぶん、せめてこの花だけはちゃんと育てたいと思ってね。…色々苦労はしたけど、最終的には何とか花が咲かせられるようになつたんだ。やつと花が咲いたときは、すごく嬉しかつたね。嬉しいなんてものじゃなかつた。宝石みたいにキラキラ輝いて見えたよ。でも、同時に、あのときこの花が咲いていれば思うと、ちょっと哀しかつたりもしたね」

先生はそう言つと、口元の隅に、哀しみが淡く透けて見えるような微笑を浮かべた。

あの花が咲いていれば、先生の子供は助かつてゐたのかも知れない、わたしは先生の言葉を思考の上で反芻しながら、色素の薄い黄

色の花を眺めていた。花の上を流れ落ちていく、ほのかに青色の色素を含んだ水の滴は、先生の哀しみそのもののように思えた。

「まあ、昔のことや」と、先生は過去への未練を無理に引きちぎりうとするように呟き言つた。そして、「とにかく、この花を頑張つて育ててみなさい。育てるのが難しけど、そのぶん、花が咲いたとき、喜びが大きいし、もし何か願いごとがあればきっとそれは叶うはずだよ」と、先生は言つた。

先生が倒れてしまったのは、その日から一週間も経たないうちだつた。突然授業中に倒れたかと思うと、そのまま意識を失つて重体になつてしまつた。原因は脳溢血だった。

先生の意識は一週間経つても戻らないままだつた。

学校でも先生のためにみんなで何かをしようという話になつて、千羽鶴を折つてそれをプレゼントしたりした。だけど、先生の意識が戻ることはないままだつた。

そんなとき、わたしが思いついたのは、先生にもらった花を、光輝草を、育ててそれをプレゼントすることだった。自分ひとりだけの力で花を育てることができれば、先生の命を救うことができるような気がした。

わたしは早速、光輝草を育てはじめた。だけど、なかなか思うように育ってくれなかつた。芽が出たかと思うと、すぐにそれは枯れてしまつたりした。そんなふうな状態がしばらくの間ずっと続いた。

でもやがてどうにか、ある程度の段階までは育てることができるようになった。後もう少しで、薔薇がつくだろうといったところまでいった。でも、そこから先がどうしても難しかった。何度もやってみても、それ以上成長してくれないので。力を使い果たしたように途中で枯れてしまう。気がつくと、先生が倒れてからもう三ヶ月以上が経とうとしていた。

やっぱり、わたしには無理なのかもしれない、と思つた。アサガオすら満足に育てることができなかつたのだ。それがいきなり、花が咲くだけでも奇蹟のような植物を育てるのことなんて、最初から無理があつたのだ、とそう思つた。いつそのこと、もう諦めてしまおうかとも思つた。

だけど、先生のことを想つと、そういうわけにもいかなかつた。花を咲かせることができないまま、先生も過去に子供を亡くしてしまっている。そう思つと、何とかしてこの花を咲かせたい、と強く思つた。

でも、いくらそう思つても、結果はいつも同じだつた。時間ばかりが流れていつた。茶色く変色した植物の残骸は、先生の死をイメージさせた。枯れた植物に手で触ると、アサガオのときと同じよう、ボロボロに崩れてなくなつてしまつた。

冷たい風がその植物の破片をどこかへ運び去つていつた。

花の想い

「…僕の妹がね、好きだった花なんだよ。この花は「雨音と共に、後藤さんの声がゆっくりとわたしの意識のなかに広がつていった。

ちょっとどぎつくりしてとなりを振り向くと、後藤さんは少し可笑しそうに口元で笑つて、「どうしたの?」と、訊いた。

わたしは口元で曖昧に笑つて誤魔化した。それから、「妹さんが好きだったんですか?」と、取り繕うようにそう尋ねてみた。

すると、後藤さんは短く、うん、と頷いて、五秒間くらいの間何か物思いに沈むように黙つていた。それから、「僕がこの仕事に就いたのは、妹の影響が大きいんだ」と、言葉を続けた。「妹は植物が好きでね、家庭の庭で色んな植物を育てたりしてたよ。しまいには、育てる花のひとつひとつに名前をつけるぐらいの勢いでね」

後藤さんはそう言つと、軽く笑つた。微かに水気を含んだような笑い方だった。

後藤さんの妹ってどんなひとなんだろう、とわたしは勝手に想像を膨らませていた。きっときれいなひとなんだろうなあ、と思った。

「…子供の頃からそんな感じだから、当然のように大学もそつちの方に進んだよ。ガーデニングとか、環境計画とか、そういう関係にね。そして大学を卒業すると、もつとそつちの方面の研究がしたいっていうことでイギリスの方に留学したんだ。…僕と違つて、妹は結構優秀だったんだよ」

後藤さんはそう言つと、苦笑めいた微笑を口元の隅に浮かべた。

雨音が優しく響いていた。雨音に呑わせるように世界は透明な声で何かを歌っているように感じられた。その歌声はどうしてか哀しげに感じられた。目の前に咲く、紫水色の花は、雨に濡れてますますその色彩の美しさを際ださせていいくよに思えた。

「確かに、妹が留学してから一年ぐらいが経った頃かな、僕は旅行も兼ねて妹を訪ねてイギリスにいったんだ。そのとき妹は大学の寮みたいなところに住んでんだけど、その寮の彼女の部屋に、この花が飾つてあってね、すごくきれいな花だなあって思ったんだ。

訊いてみると、妹はつい最近スイスがどこかその辺に旅行に行つてきたらしくて、そこで偶然この花を見つけて、摘んできたらしいんだ。…日本に帰つてからもその花のことが忘れられなくてね、色々調べて、実は日本でもこの花が栽培されてるっていうことを知つたんだ。そして実際に自分で育ててみたくなつて、育てはじめたんだよ。

…それぐらいの頃からだね、僕が少しずつ植物に興味を持ちだしたのは、そのうち、どうしても何か植物関係の仕事がやりたくなつてね、それでその当時勤めていた会社を思い切つて辞めると、花屋さんでアルバイトを始めたんだ。そしてそこで長く働いているうちに、今のこの会社を紹介されて、就職したつていう感じでね…

後藤さんはそこまで話すと、わたしの方へ視線を向けて、「…ごめん。こんな話退屈だね」と、言つて、苦笑するよに笑つた。

わたしは首を振つて、そんなことないですよ、と答えた。そして、もっと話を続けてください、と言つた。すると、後藤さんはちょっと戸惑つたような表情を浮かべて、それから軽く頷くと、また花の

方へ視線を向けて何秒間の間黙つていた。そして、

「…妹が死んだのは、次の年の冬だつたね」と、ポツリと告げた。

わたしは後藤さんの言葉があまりにも唐突に感じられて、後藤さんの横顔をまじまじ見つめてしまった。

「その年の冬がすごく寒かったのを今でもよく覚えてるよ。妹はもともと身体が弱かつたから、その寒さがよつほど忘れたんだろうね。…風邪をこじらせて、肺炎にかかつて死んでしまった…」

後藤さんはそう言つと、しばらくの間黙つていた。わたしも黙つていた。沈黙のなかで、ひとつひとつ雨音が大きく拡大されて聞こえた。

「…だけど、直接の原因はその寒さじゃないんだ。妹はちょっと無理しすぎたんだよ。まだ風邪の治りきらない身体で、強引に研究を続けようとして、それであんなことになつてしまつた。…まあ、妹らしいといえば妹らしいんだけどね」

後藤さんの瞳をよく見てみると、花の紫水色の色彩と雨の色彩が重なり合つように溶け込んでいた。それは後藤さんの意識というリズムを通して、そこに現れた儂い光のように思えた。

「妹はイギリスの病院で息を引き取つたよ。…日本に連れて帰る間もないほど、あつけない死に方だつた。雪の変わりに、恐ろしく冷たい雨が降る朝だつたね」

そう言つた後藤さんの声は、そのときの感情がそのまま凍りついて残つているみたいに寂しげに感じられた。

わたしは黙つて、後藤さんの妹のことを考えていた。外国の、雨の日の陰鬱な光に濡れた薄暗い病室で、寒さに押し包まれるよつて死んでくということを、考えていた。

「妹が大学で研究していたのは、この雪解草だった。向こうで、妹の荷物とかを整理してたときに、この花に関する論文だとか、データーだとか、文献だとかが一杯でてきてね。…なんだろう。そのときになつてはじめて泣いたよ。それまでは全然涙なんて出てこなかつたのに、そのときになつて急に喪失感みたいなものが込み上げてきてね、妹が住んでた小さな部屋で声を出して泣いたんだ…」

後藤さんはそこまで話すと、ふととなりにわたしがここにことを思い出したようにこちらを振り返って、田元で哀しみを誤魔化そうとするように微かに笑つた。そしてまた花の方へ視線を戻すと、「妹の部屋はひどく寒かつたな。…泣いてる側から涙が凍つてしまいそうなくらい冷たい部屋だったよ」と、ひとりごとを言つように小さな声で言つた。

後藤さんの言葉を、あとから雨がやわらかく濡らせていった。後藤さんの言葉は雨と共にこの地面に染みこんでこくよつと思えた。

「…だから、僕はこの花に特別な思い出があるんだ。妹が好きだった花を、自分で育てて、日本に広めたくてね…それでかなり強引に社長を説得して、今年からこの花をやらせてもらつことにしたんだ」

わたしは後藤さんの横顔に向けていた視線を、後藤さんの視線の先を辿るように花の方へ向けた。紫水色の花は雨に濡れて、優しく輝いて見えた。

「…きっと、妹さんも喜んでるんじゃないですか？」
と、わたしは言つてみた。

すると、後藤さんはちらりとわたしの方へ視線を向けると、軽く頷いて、「そうだといいね」と、静かに微笑みながら言つた。

空から落ちてくる水色の粒は、地面に辿り着くと、そこに淡い水色のきれいな花をいくつも咲かせていった。辺りにはその花が咲くときの、少し水気を帯びたような、やわらかく澄んだ音がいつまでも響いていた。

結局、苦労の末に、わたしは何とか光輝草を咲かせることができた。ある日、突然淡い黄色の蕾がついたかと思うと、わたしの見ている前で、ゆっくりと蕾が開いて花が咲いたのだ。

それは日曜日の早朝だった。早起きしたわたしが鉢植えの前に座って、じっとその蕾を見ていると、小さな黄色の蕾からまるで光が放射状に広がっていくように花が咲いたのだ。それはまるで生まれたての希望のように思えた。

わたしはその日のうちに先生が入院している病院に花を届けにいった。そして、その花を届けてから三日もしないうちに、先生はうそのように意識を取り戻した。いくらか後遺症は残つたものの、深刻な事態には至らなかつた。

あのときの花の種は、今でも大切にしまつてあって、ときどきそれを取り出しては先生のことを懐かしく思い出したりする。先生は今でもまだ元気にしていて、「じゅたまに、絵葉書が届いたりする。

会社から帰るときになつてもまだ雨は降っていた。でも、それは以前に比べるとだいぶ穏やかなものになつてきているみたいだつた。明日になれば、もう晴れ間が覗いているかもしれない。

結局今日は仕事がなかなか終わらなくて残業になつてしまつた。でも、どうしてか、それほど疲れは感じなかつた。ふたつの花の記憶が、わたしの心を優しく震わせていつたせいかもしない。哀しみを含みながら、でも同時に何かを解放していくような潤いに満ちた花の記憶。

帰りの電車のなかで、ケータイにメールが届いた。それは学生時代の友達からのものだつた。メールには「今度の日曜日久しぶりにみんなで会わない？」と書いてあつた。わたしはその場ですぐに返事を返した。もちろん、承諾を伝える返事だ。みんなに会つのが、その瞬間から楽しみだつた。

暗い電車の窓ガラスに線を描いていく雨粒眺めながら、わたしは今日薔をつけていたバラのことを考えていた。後藤さんの話では、明日の朝には咲いているだろうということだった。ほんとうに咲いているといこな、と思つた。

明日はいつもより少し早く家を出ようと思つた。そうすれば、朝日のなかで、遠慮がちに薔を広げるバラの花を見ることができるかもしれない。

明日が待ち遠しかつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7058c/>

花の雫。

2010年10月11日00時29分発行